

「重荷を負い合う」 ～重荷をおろす～

ガラ6：1～8

「助け合う」と聞くとどういうイメージがありますか。あなたが「助けてもらった」と感じるのはどういうことでしょうか。手をつなぐ・・これだけで本当に助けられたと感じるのでしょうか。私たちの「助ける」が本当の助けになっていないことがよくあります。話を聞く、声をかける、励ましてはあれど助けになりません。助け合うとは重荷を負い合うことなのです。重い荷物を持っている人に「がんばれ」と言ってあげても仕方ありません。負うということはその人が達成できるように一緒に向かわなくてははいけません。しかし私たちは自分を中心にいるのでなかなかできません。昔の制度に五人組というものがありました。これは年貢を納めるのに一人の農家が年貢を納められないときは他の4人で補うという制度でした。だからよその人に迷惑をかけないように生きなければならないそのような概念になったのです。それによって私たちはよいことをすると狭いところでしか見られず、家族、隣近所のことだけになるのです。自分に利害のある人は助ける、これは自分が困ったときに助けてもらうためそういう概念があるのです。だから助け合うということがそれ以外の人には「大変ね」と同情することになるのです。しかし聖書では同情を非常に嫌います。「重荷を負い合う」同情ではなく心を配りなさいという概念なのです。だから本当の心を配ることを考えなくてははいけません。私たちは新しいこと、よいことをする事に羞恥心を感じます。だから私たちにはで過ぎたことをしないという概念があります。そして助け合うということも、周りからの考えで嫌々させられてきたので「恩を仇で返しやがって」「これだけのことをやってやったのに」となるのです。これは助けることにも重荷を負い合うことにもなりません。（ガラ6：1～8）ヤコブの末の子ヨセフは、兄弟たちから憎まれます。いわれのないことで兄弟にエジプトに奴隷として売られ、いわれのないことで牢に入れられ・・・ヨセフの人生は大人になるまでこういう人生でした。あなたならどうですか。普通ならふてくされますが、彼は夢を解き明かせと呼ばれた王（パロ）の夢を解き明かしてあげました。私たちは悪い状況になればすぐに「もうしらない」となります。負い合うとは、悪い環境にあっても感情に流されずにその人の立場にたって考えてあげることです。イエス様がした行動は、自分がしてもらったことに対してではなく、その人の重荷を負い合う行動でした。愛のある行動を通して人を変えたのです。私たちはキリストの香りを放つものにならないはいけません。私たちはイエス様に重荷を負ってもらったのです。その代わりに私たちが負うべき重荷を負う、そしてそれは重荷とはならないと言っています。助け合うとはあなたが愛されたということを知って初めて人を助けることができます。助けるときにその人の立場になれるのはあなた自身が重荷を背負ってもらっていることを知るからなのです。助けるということは愛することなのです。私たちは自分ひとりで生きているように思いますが、立てなくなった時に後悔します。自分が立てているときは弱っている人を助け、あなたが、助けが必要なときはたくさんの方が助けに来てくれるそれを喜ばばよいのです。人は助けることを通して自分の重荷を下ろすのです。①**重荷を共に負う**。（詩41：1～3）弱っている人に心を配ることが、あなたが立てている理由なのです。家族にできなければ隣の人にはできないし、遠くの人に絶対にできません。困っている人を助けることで自分の存在理由がわかるのです。ヨセフがいじめられエジプトに売られたのも家族が飢饉のときに救われるためでした。神の計画に従って歩む人には神はすべてを働かせて益としてくださることを私たちは知っています。本当にその人の重荷を負う実感を持ってください。あなたが負っても持てないこともあります。しかし一緒に向き合う気持ちを持たなくては負い合うことにはなりません。負い合うとは「私も負ってあげるから私のも負ってね」ではありません。あなたがその人の重荷を負ってあげたら、あなたの重荷は神様が負ってくれるということなのです。人の重荷より、自分の重荷の方が重いのです。だから自分の重荷は神様に委ねなくてははいけません。正しい思いを持っている人は助けられます。でもその人は助けてほしくてやっているわけではありません。自分中心ではないだけです。自分のことだけ・・自分を一人にしてはいけません。神様は私たちに家族を与えたいのですが、私たちは自らを孤独にする方向へ持って行ってしまいます。でもそれでははいけません。小さいところから始めればよいのです。そうすればあなたの重荷も隣の人の重荷も共に負ってもらえる人に負ってもらえるのです。②**主にあなたの重荷をゆだねる**。「あなたの重荷を主にゆだねよ。主は、あなたのことを心配してくださる。主は決して、正しい者がゆるがされるようにはなさない。（詩55：22）正しいものとは困っているよるべのない人に水いっぱい差し出す人のことです。③**正しい道に導く**。助けるときには正しい方向へ導かなくてははいけません。しかし私たちは違う方向へ導いて行ってしまいます。「わかる」これは助けることにはなりません。それはあなたの傷をなめあっているだけです。助けるという概念を変えなくてははいけません。重荷を負って一緒に迷路に行つてはいけません。あなたが重荷を負うためにはあなたの重荷を下ろし傷のない状態でなくては負うことはできません。あなたの重荷を下ろし、その人の重荷を負う、そこでイエス様の愛がわからなければ人の重荷を負うことはできません。本当にその思いがなければ助け合うことはできません。愛されたことがなければ愛せないし、関心を持たれたことがなければ関心をもつことはできません。私たちはされたようにしかできません。だから本当の父に接木されなくてははいけません。あなたはそのままではいけないことを知っているはず。あなたの重荷を下ろしてください。必ず助け手を送ってください。そして重荷を持って帰らないで下さい。そして助けてあげるべき人に助けの手を差し伸べてください。自分だけだなんていっていると必ず後悔します。赦すと決めてください。憎しみに生きてもしかたありません。土台が大事です。自分の重荷を持つことで安心していませんか。「神の国とその義」これは神を愛することと隣人を自分のごとく愛することです。困っている人がいるのに隣を通りすぎていくような者になってはいけません。そして私たちは助けが必要なときに素直に助けてと言えないのですが、本当に困っているのであれば助けてといえればよいし、その分困っている人を助けてあげればよいのです。あなたの心を配ってあげてください。あなたの周りにあなたの助けを求めている人がいます。あなたの隣の人に目を向けて助けてあげてください。あなたの重荷を下ろし、負うべき重荷を確認し、重荷を負うことをやめてしまった人たちに重荷が持てるようにあなたのできることで協力してあげてください。重荷を負うすばらしさをあなたから感じさせていきましょう。（要約者：岩崎祥誉）